

最貧困層のための地場の食料確保と栄養改善事業（第2期）

写真資料



土地が狭く、十分な量の米が生産できず食料不足に陥る農家が多い。
第1期におけるSRI（発芽後15日以下の幼苗を1本で植えていく手法）のパイロット実施では、収量が1.2倍に増加した。



約80%の村人が家庭菜園を行っているが、毎月4種類以上の野菜を栽培できているのは19%に過ぎない。一年を通して多様な栄養を含む野菜を栽培できるように菜園デザインや農業技術の研修を引き続き行っていく。



住民参加の調査により、多くの村において、年間2回の食料不足の期間があることが判明した。



村人たちは、伝統的に山や川、水田から採れる野草や昆虫、エビやカニなどから貴重な栄養を摂取してきた。



鶏糞は肥料として菜園活動に用いられる。農薬や化学肥料の購入は、現金収入の少ない少数民族にとって借金の原因にもなっている。農業と家畜飼育等をリンクさせた循環型農業の実施を進め、持続的な生産活動かつ現金収入の向上にも役立てていく。



事業地においては、子ども達の発育障害率が34%にもものぼる。食料の不足に加え、母親や医療従事者の栄養や保健に関する知識・技術の不足もその原因になっている妊産婦健診の推進や栄養教室の実施などを実施していく。